

研究区分	教員特別研究推進（教育推進）
------	----------------

研 究 テーマ	道徳の伝達と再生産を巡る人間—環境の循環システムの解明：奄美群島の民話の分布と聞き手・語り手の解釈に注目した社会生態学的検討からのアプローチ				
研究組織	代 表 者	所属・職名	静岡県立大学国際関係学部 ・准教授	氏名	坂本 剛
	研究協力者	所属・職名	岐阜大学大学院教育学研究科 ・教授	氏名	吉澤 寛之
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発 表 者	所属・職名	静岡県立大学国際関係学部 ・准教授	氏名	坂本 剛

講演題目
文化的産物を介した道徳の伝達と再生産：民話解釈に基づく社会生態学的検討
研究の目的、成果及び今後の展望
人々がどのような種類の道徳をより重視するかは社会的環境によって異なる（e.g., Haidt, 2012; Henrich, 2020）。本研究は多様な道徳のあり方が社会的に伝達・再生産されるプロセスを社会生態学的観点から解明することを目的とする。そのため伝達と再生産のプロセスの結節点となる文化的産物に注目する。本研究は、環境が文化的産物と道徳の双方に影響を与え、さらに文化的産物と道徳が相互に影響しあいながら再生産されるという動的過程を想定する。とくに文化的産物は道徳の伝達媒体として機能する一方で、人々の道徳的傾向が文化的産物の選好や変容に影響する。本申請ではこの相互作用のうち、文化的産物から喚起される道徳的要素の個人間の変動を手がかりとして、地域ごとの道徳的関心の偏りを捉えるための基礎的検討を行う。 文化的産物の一つである民話は民間の言語伝承の一分野であり、宗教的信念や道徳、教訓などを伝達する。本研究では民話の社会生態学的検討の手始めとして、鹿児島県奄美群島を対象とした検討を試みる。同地方の民話は真実に傾斜して叙述されやすく、伝統的慣習と関連して機能してきた。そのため道徳の伝達・再生産とより強く関連したと考えられ、一連の検討の第一の試みのフィールドとして適している。 対面での面接法を用いて、対象者への読み聞かせを基に話の内容や教訓に関する解釈の説明を求め、話から喚起される道徳的要素への敏感さの差異を居住地や出身地の地理情報と関連づけて考察し、次フェーズにおける道徳への感受性と地域を関連付けた道徳分布データセット作成の足がかりを得る。そのため今回は現地社会の伝統的慣習に比較的慣れ親しんだ経験のある者を調査対象とする。 奄美群島で採集された民話資料（5冊，全1031話）から出現頻度を中心に12話を選定した。静岡県立大学倫理審査委員会の承認を得て（承認番号2025-22），8月25日から30日にかけて全9回の面接調査を行った（$n=17$, $M_{age}=83.82(\pm 5.65)$）。面接の所要時間は2時間で、一回につき1－3名を対象とした。 調査対象による民話の解釈には一話につき平均$1.28(\pm 0.45)$ 個の道徳的要素が含まれていた。大島南部出身者ほど一話当たりの道徳的要素の数量が多くなる傾向が伺えた。また要素喚起には話の内容と結びつく個人的な生活経験の有無が関わることが示唆され、コホート差に注視する必要があると考えられた。 今後はサンプルの地域的多様性を拡張し、道徳的要素の分布と環境指標との対応関係を検証することで、地域レベルでの道徳的傾向の形成過程の解明を目指す。具体的には大島北部出身のサンプルも充実させることと30－50代の壮年世代へのアプローチが必要となるほか、質問紙調査に向けた工夫が課題となる。